

ユジノサハリンスク駐在員事務所

【日本海から大嵐がサハリンへ】



6月12日の「ロシアの日」から3日間、ユジノサハリンスクの市民は日本海から来た大型低気圧の影響を強く受けて、暴風雨に見舞われ、この日予定されていた野外イベントも全て中止となるなど、パニック映画の中でも居る様な怖い体験をしました。

風速は最大35メートルまで達し、3千本以上の樹木がなぎ倒され、サハリン南部では広い範囲で停電が生じ、約2万人が影響を受けました。また、マンションの駐車場に止めて置いた車の数百台が樹木の下敷きになるなどの被害を受けました。



このように甚大な被害状況の中、ユジノサハリンスク市は非常事態宣言を発令し、復旧作業には軍隊にも協力を要請しました。この間、トラック170台で処理された木の破片等は5千㎡にも達しました。災害後一ヶ月以上経ちましたが、ユジノサハリンスク市内の至る所で屋根修理などの工事が今も続いています。街を歩くと今でも傾いた電柱、まだ処理されていない倒れた樹木などが見られ、被害規模の大きさを物語っています。今回は数十年に1度の大災害に見舞われましたが、台風被害が多い日本に比べ、サハリンの住民は自然災害に対する準備が全く無防備であることを痛感させられました。

マリア・ヤロヴェンコ

中国遼寧大学語学留学生

【不正取締りから見えてくる中国の今後】



習近平総書記は就任以来、大きな腐敗も小さな腐敗も同時に取り除くことを公言、「虎と蠅を同時に叩く」と例えているが、最近これを象徴する事件が全国的に大きく報道された。

瀋陽市の隣、本溪市の高校で、入学試験の際スポーツエリートに対して得点を上乗せする優遇制度が組織的に悪用されていたという。優遇を不正に受けるため普段はスポーツと無縁の数十名の学生がユニホームを着て写真を撮影し、これを提出するだけで入学試験の際に優遇措置を受けていたのだ。

報道以降、学校側は不正を行った生徒を退学処分するなどしているが、この問題は遼寧省にとどまらず全国各地に飛び火し、各地でも同様の事件が大きく報道されている。

中国では、腐敗・不正撲滅が叫ばれて久しいが、これまでは高官や地方の公務員が対象で、一般市民には縁が薄い印象が強かった。しかし今回の事件は一般市民、しかも学生であっても例外ではないことを強く印象付けた。

今後、中国一般庶民のコンプライアンスやモラルに対する意識が、どのように変わっていくのが注目していきたい。

小笠原 宅麻

ウラジオストク駐在員事務所

【ウラジオストクの気候】

第1回目に「ウラジオストクの道路事情」をお送りしましたが、第2回目として「ウラジオストクの気候」についてお知らせします。

ウラジオストクはケッペン気候区分では「亜寒帯冬季少雨気候」に分類され、夏は温暖で多くの雨が降り、冬は雪が少なく乾燥していることが特徴として挙げられます。

年間で最も暑くなる8月の平均最高気温は19.8ほどで比較的過ごしやすく、1月の平均気温は-12.3にもなり、非常に寒くなります。日本で最も寒い陸別町の1月の平均気温が-11.4であり、札幌市と同緯度ではありますが、冬は寒さが厳しいです。沿岸地方に位置することから内陸部の都市ほど寒暖の差が激しくないため、比較的生活しやすいのではと思っております。

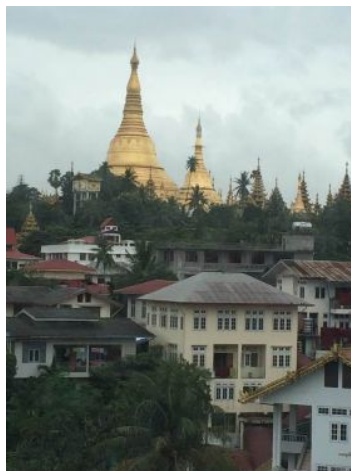
年間の降水量は800mmほどとなっており、日本と比べると雨が少なく感じられるかもしれません。6~9月にかけて500mmほどの降水量があり、特に8月に最も多く雨が降ります。秋から冬にかけては雨・雪も少なく乾燥した日が多くなります。また、沿岸地方に位置することから年間を通じて霧がよく発生するほか、冬には北風が強く吹く日が多く気温以上に寒さを感じます。北海道育ちの私には北海道とそれほど変わらない気候でありまして、過ごしやすい毎日を送っております。



伊藤 清平

カシコン銀行

【タイ 隣国ミャンマーについて】



先日ミャンマーに行ってきました。タイ最大の隣国であるミャンマーは、日本の約1.8倍の国土、タイに匹敵する6,000万人超の人口を保有する国家で、タイと中東を陸路で結ぶ重要な位置にあり、さらに人件費はタイの約7分の1という安価な労働力を持っていることから、タイプラスワンとして製造業から非常に注目されている国です。また、将来的にはその人口の多さから、消費市場としての可能性としても魅力があると言われております。ミャンマー最大の商業都市ヤンゴン（首都はネピドー）を訪れました。人口はミャンマー最大の約600万人。空港からヤンゴン市内へと向かう車の中から見た風景は廃墟のようなビル、信号がほとんど無く渋滞する道路、スコールで冠水する公道、その中で一部近代的かつ英国風（かつてイギリスの植民地）のビルに加え、金色に輝く寺院が点在しているというなんと表現していいのか難しい光景が広がっていました。所得水準はタイの7分の1と言われており、確かに物価もタイ（バンコク）よりは格段に安かったですが、なぜかスマホだけは皆さん持たれていました。

タイの過去10年間の飛躍的な成長を鑑みれば、ミャンマーという国家も人口、土地、国民性というファンダメンタルズは保有しており、将来的なマーケットへの成長もそれほど遠くない未来なのかもしれません。

伊藤 彰浩